緋弾のアリア ～硬き鋼のG【ギャバン】～

レティス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

凶悪犯罪が増加する世の中、武装探偵、通称［武偵］が存在する。そんな中、一人の青年も日本の東京へやって来た。その青年は最新鋭のコンバットスーツを纏い、そして凶悪犯罪に立ち向かう！

蒸着せよ、宇宙刑事ギャバン！

目次

鋼鉄　～ギャバン～ ―――― 1
奴隷宣言!? ―――― 6
パーティー勧誘（強制） ―――― 19

鋼鉄　～ギャバン～

成田空港に到着した俺は、空港を出る。
「久しぶりの日本だな…。」
俺、白銀光は外の空気を吸って呟く。俺は元々ニューヨーク武偵高校に通っていたが、〝上〟からの命令で日本の東京武偵高校へ転校することになった。
武偵とは〝武装探偵〟の略で、近年増加している凶悪犯罪に対抗するために新設された国家資格のことだ。武装を許可され、逮捕権も有する限りなく警察に近い存在だ。違うところは、金をもらうことで武偵法の許す範囲ならどんな狂った依頼でも引き受ける…所謂何でも屋だ。
もちろん俺も武装はちゃんとしてある。防弾仕様の制服のホルスターにはＨ＆ＫＵＳＰ、ＳＯＢホルスターにはバックアップ用のグロック２６が入っており、ポケットにはそれぞれのマガジンが入っている。両手には特注の黒いオープンフィンガーグローブをはめている。そして制服の背中には〝例のもの〟を仕込んでいる。
俺はそろそろ東京武偵高校へ向かおうと駐車場へ向かう。荷物に関しては宅配便で自分が入る寮の部屋へ送ってもらった。そして自分のサイドカーも〝上〟の人にこの

駐車場に置いておくよう頼んでもらった。
「えーと、確かここらへんに……あった！」
俺はようやく自分のサイドカーを見つけた。全体的に青がベースカラーで、勿論防弾仕様だ。俺はサイドカーに乗り、助手席側に鞄を置き、ヘルメットを被る。そしてポケットから鍵を取り出し、サイドカーの挿入口に挿し込んで回し、エンジンを起動させた。
「さて、行くか。」
俺はサイドカーを発進させると、東京武偵高校へ向かう。

―――――――――――――――――――――

東京武偵高校…レインボーブリッジ南方に浮かぶ人工浮島に設立された武偵を育成する場所だ。俺はサイドカーを運転しながら武偵高校を確認する。そういや長官から聞いたけど、最近〝武偵殺し〟なる事件が相次いでいるらしい。犯人は捕まったらしいが、あれは模倣犯らしい。真犯人は別にいる……ん？
「…何だ？」
俺は別の道で一人の青年が必死に自転車を漕いでいるのが見えた。制服を見るかぎ

り、俺と同じく武偵高校の生徒らしい。何であんなに必死に漕いでいるんだ…？バスに遅れたからか？

俺はそんな事を思っていたが、その考えはすぐに変わった。

「っ!?」

その青年を無人のセグウェイが追跡していた。セグウェイにはカメラとメガホン、そしてＩＭＩ　ＵＺＩが装備されている。何者かが遠隔操作で追跡しているのか…？まさか、〝武偵殺し〟か!?…なら善は急げだ！俺はあの青年を助けに行こうとするが、突然俺の周りに別の無人セグウェイが８台も現れた。当然あのセグウェイと同じくＵＺＩで武装している。何処からか見られてるのか…？

「囲まれたな…。」

俺はサイドカーを止めると、その上に立ちながら呟く。俺は対策を考えるが、そんな暇を与えるはずもなく、無人セグウェイ達から９ｍｍパラベラム弾が発射された……仕方ない、日本来て早々だけど、やるか…！

「蒸着！」

俺はポーズを取りながら叫んだ。銃弾が俺に命中する直前、俺の身体を光の粒子が覆った。そして無人セグウェイから放たれた銃弾が命中し、その影響で煙が舞う。

「…。」

煙が晴れたと同時に、姿を変えた俺がセグウェイのカメラに映った。黒いスーツに銀色の装甲、そして胸部に備えられたカラフルなコントローラーに頭部のセンサーといういかにもメカメカしい姿。そう、俺は最新鋭の戦闘用強化鎧【コンバットスーツ】・ギャバンｔｙｐｅ・Ｇを纏ったのだ。どうして銃弾が当たる直前で蒸着が完了したのか？何故ならば、蒸着の時間は０．０５秒に過ぎないからだ。では、その蒸着プロセスをもう一度見てみよう。

――――――――――――――――――――

「蒸着！」

まず、〝蒸着〟という言葉はギャバンを装着するためのコードだ。このコードが発せられると、人工衛星ドルギランからコンバットスーツ・ギャバンが粒子の状態で電送される。その粒子が俺の身体に付着すると、それらがコンバットスーツを構成していき、蒸着が完了する。

――――――――――――――――――――

「宇宙刑事…ギャバン！」

蒸着を完了した俺は名乗りを挙げた。俺も当初は何で〝宇宙刑事〟が付くのか分からないが、長官曰く『宇宙から採取されたレアメタルで構成された鎧を纏った刑事』とのことらしい。まぁ別のもので例えるなら…『宇宙キター！』と言えば、分かるだろう…。

そうしている間にも、無人セグウェイは再び射撃を再開した。だが、そんな程度じゃこのスーツに傷一つつかないぜ。

俺はＵＳＰを取り出すと、１台目の無人セグウェイに向けて構え、引き金を引く。ＵＳＰから放たれた９ｍｍパラベラム弾は無人セグウェイに向かって真っ直ぐ飛んでいき、無人セグウェイに装備されたＵＳＩの銃口へ進入した。すると、ＵＳＩが内部から破壊された。セグウェイ自体を壊さなくても、武装を無力化すればいい。

俺はこの調子で一台ずつ無力化していき、そして全てのセグウェイの武装は破壊した。丸腰になったセグウェイ達はそのまま何処かへ逃走していった。ふぅ…これで全部片付いたかな？

俺は蒸着を解除すると、ＵＳＰをホルスターに仕舞う。そして再びサイドカーを発進させて武偵高へ向かう。そういえば、あの青年は大丈夫かな？

奴隷宣言!?

武偵高に到着した俺は、駐車場にサイドカーを停車させる。鍵を抜き、舟部分に置いてある鞄を取る。そしてサイドカーから降りると、校舎へ向かう。そういや、今日って始業式だよな?だけど始業式には参加しなくていいって言われたから別に多少なら遅れてもいいんだったよな…?

――――――――――――――――――――

「失礼します。」

俺は鞄を持ちながら教務科【マスターズ】へ入る。教務科【マスターズ】にはその名の通り武偵高の教職員が所属している、普通の学校でもよく見る職員室だ。だけど武偵高の教職員は…極めて異常だ。

何故なら教務科【マスターズ】の教職員の前歴が自衛隊、警察ＯＢ、特殊部隊、傭兵、マフィア、果てには殺し屋だった人物が数多くいるからだ。不用意にここに入った者は確実に蜂の巣よりえげつないことになる。だが俺は用があるからここに来ている。俺

は移動し、自分の担任となる先生のもとまで行く。
「えーと、貴方が白銀光君ですね？」
「はい。」
俺がその先生に近づくや否や、先生は俺の名前を確認してきた。
「私は貴方の担任になります、高天原ゆとりです。白銀君のことはニューヨーク武偵高の方から聞いてますよ。」
「あ、それはどうも。」
今俺と話している会話相手は、俺の担任になる2年A組の高天原ゆとり先生だ。俺は2年A組に入ることになるらしい…にしても、一見してのんびり屋で美人だな…けど、なんでこの武偵高で教師やってるのか分からない。そんなこんなで話は進み、俺は先生から寮のカードキーを受け取る。
「そういえば、あともう一人来るはずなんですけどねぇ…。」
「もう一人…？」
もう一人転校生がいるのか？俺がそんなことを思っていると、教務科の入り口から一人の少女が入室してきた。小柄な体格にピンク色のツインテールだ。その少女は入室すると、こちらの方へやって来た。どうやらあいつも転校生のようだ……あれ、あいつは確か…？

「ん？あんたもしかして、光？」
「ああ…久しぶりだなアリア。お前もここへ転校して来たんだな。」
「ええ。」
この少女の名前は神崎・H・アリア。日本人とイギリス人のハーフで、かの有名なシャーロック・ホームズの子孫でもある。ロンドン武偵局のもと、ヨーロッパ各地で活躍したSランク武偵だ。俺もアリアとは1年前にロンドンでの任務で共闘したから、多少は面識がある。どうやらもう一人の転校生はアリアだったらしい。

――――――――――――――――

俺とアリアは高天原先生についていく。
「ねぇ光、最近この辺りで【武偵殺し】なる事件が起きているのは知ってる？」
「知ってるさ。俺も登校中に遭遇しちまった。あの時は囲まれたから日本へ来て早々大変だったさ…。」
移動中、俺とアリアは【武偵殺し】についての会話をしていた。俺はあの時囲まれたから蒸着せざるを得なかった。それにしても、あの大量のセグウェイを遠隔操作していた奴は一体誰だ…？
「アリアの方は？」

「あたしも遭遇したわ。それに…。」
「それに？」
「あ、あたしが助けたあいつに…へ、変なことされたのよっ!?しかも何げにキャラ変えてたしっ！」
「おう…それは災難だったな…。」
どうやらアリアも【武偵殺し】に遭遇したらしい。しかも大変な目に遭ったという、それはそれで災難だな…。
そんなこんなで、俺達は2年A組の教室へ着いた。先生に呼ばれるまで入り口で待機してるよう言われ、俺達は一旦その場で待機する。
「今日は転校生が二人来ています。まずは白銀光君、どうぞ～。」
最初は俺か。俺は先生に呼ばれると、教室の扉を開けて中へ入り、皆の前に立つ……ん、あいつは確か、あの時見かけた奴か？
そんな事はさておき、俺は自己紹介を始める。
「初めまして、白銀光です。ニューヨーク武偵高から転校してきました。よろしくお願いします。」
俺は丁寧な挨拶をした。すると、クラスの皆が俺に関しての噂話を始めた。もっとも、俺は帰国子女だ。そして二代目ギャバンだ。そりゃ噂が絶えないだろうな…。

「では光君は理子ちゃんの前の席に座って下さいね。」
　俺は先生に言われて指定された席へ移動する。どうやら理子という金髪ツインテールの女子の前の席らしい。それにしても、理子の制服はやたらと改造を施しているな。見た感じゴスロリ風というか何というか…。
　そんな事を思いながら俺は席に座る。
「続いて2人目は、神崎・H・アリアちゃんです。」
　俺に続いて、アリアが教室の中に入ってきた。その瞬間、あの青年が椅子から滑り落ちた。な、何だ?もしかしてアリアが助けたあいつって…あの青年のことか?
　アリアはその青年に視線を向けると
「先生、私はあいつの隣に座りたい。」
　というトンデモ発言をした。
「良かったなキンジ!よく分からないけどお前にも春が来たみたいだぞ。先生〜!俺喜んで席代わりますよ!」
「あらあら。最近の女子高生は積極的ですねぇー。じゃあ武藤君、アリアちゃんと席を代わってあげて。」
　ツンツン頭の青年・武藤が手を挙げながら席を代わると発言した。どうやらあの時自転車に乗ってた青年はキンジという名前らしい。それよりもいいのか?めっちゃキン

ジの顔が青ざめてるけど…。

アリアはキンジの方へ近づく。その手には何故かベルトが握られていた。

「キンジ、これ。さっきのベルト。」

そう言ってアリアはキンジにベルトを投げ渡した。そのベルトはキンジのかよ……ってかキンジ、一体どうしたらベルトを落とすんだ…？

「理子分かった！分かっちゃった！これ、フラグがばっきばきに立ってるよ！」

ここで、理子が席を立ちながら言った。めっちゃ瞳をキラキラとさせているなオイ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような〝何らかの行為〟をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり二人はあっつい恋愛の真っ最中なんだよ！」

理子はそう推理した…あいつはアホの子確定だわ。そして理子のおバカ推理に反応したのか、クラスの皆が恋愛についての内容で盛り上がった。まぁ武偵高自体、おバカが多いらしい。けどこのバカ騒ぎは本当に耳が痛い…。

俺は苦笑いをしながら耳を塞ぐ。これ、隣のクラスの迷惑ならないのか…？まぁそんな事はチャメシ・インシデンｔ…

バンバンバンッ!!

「「「「「!?」」」」」

突然鳴り響いた銃声がクラス内に漂ったアトモスフィアを破壊した。キンジ、理子、武藤、他の皆、そして俺も硬直した。何故なら、恋愛話を聞いたアリアが顔を茹でタコの如く真っ赤にしながら両手に持った黒と銀のコルト・ガバメント二丁で．４５ＡＣＰ弾を合計３発、まるで何処かの宇宙海賊かアメフト部のイカれた部長の如く天井に向かって発砲したからだ。コワイ!

この銃声では一部の人達は「アイエエエ…」と思わず口走った。

「れ、恋愛なんてくっだらない…!」

アリアは未だ真っ赤な顔をしながら言う。ちなみに武偵高では『必要以上に発砲しないこと』と書いてあるが、発砲禁止とは書かれていない。要するに発砲ＯＫだ。

「全員覚えていなさい。そんな馬鹿な事を言う奴には……

風穴開けるわよ！いいわね⁉」

バンッ！

アリアは俺達に向かって怒鳴ると、銀のガバメントでまた一発天井に向けて発砲した。アリアの念押しに「アッハイ」と答えた者が多数いたとか。

――――――――――――――――

授業が一通り終わり、俺は寮へ到着した。俺は駐車場にサイドカーを停めると、カードキーに記された番号をもとに自室を探す。

「ここだな。」

俺はカードキーを認証機器に挿入すると、赤ランプが緑に変わり、扉のロックが解除された。俺は扉を開けて中に入る。玄関には宅配してもらった荷物が置かれていた。荷物は主に私服とかだ。俺は荷物を持ってリビングへ入る。中は結構綺麗だ。この部屋は４人部屋なのだが、恐らく誰も使ってないのだろう。俺も強襲科【アサルト】だか

ら誰かと部屋をシェアするのかと思ったけど、そうでもなかった。まぁその方が快適だからいいけどな。何せ同じ強襲科【アサルト】の奴等とルームシェアするとなると、そこから導き出される答えは、テレビ争奪戦だ。それぞれ見たい番組があるがために銃撃戦が起こり、それでテレビが破壊されるなんてことがあるからだ。ニューヨーク武偵高でも同じことがあったからな……まぁ、今回は運が良かった。

俺は自分の個室に入ると、そこにあるタンスに自分の私服やらを入れる。続いて武器を入れるためのロッカーにＵＳＰとグロック２６を入れる。俺は制服の背中に手を入れると、背中の鞘に納められたものを抜き取った。

レーザーブレード…宇宙刑事の象徴たる片刃の直剣で、普段は携帯性を高めるために短刀形態になっている。だが、鍔にあるスイッチを押すことでグリップと刀身が伸縮するようになっている。これにより長剣形態へ変形する。変形機構を有するにも関わらず強靭に出来ており、滅多に折れることもない。そして名称の通り、その刀身に精神力と集中力を極限まで絞ることによって、刃に光を纏わせることが出来る。これにより威力をさらに強化できる。

俺はレーザーブレードを背中から取り出した鞘に納刀し、ロッカーに入れると、扉を閉めた。

「あ、そういえば冷蔵庫の中身あるのかな?」

俺はリビングに戻ると、冷蔵庫の中身を確認してみる。中には何もなかった。仕方ない…コンビニ行くか…。
俺は鞄から財布を取り出してポケットに入れ、コンビニへ行こうとしたその時

ピピピピピピッ！

「ん？」
突然、スマホの着信音が鳴った。俺はスマホを取り出すと、電話に出る。
「もしもし？」
『光？すぐにあたしのところへ来なさい。』
「アリア!?お前一体何処で俺の電話番号を…？」
『いいから来なさい！』
「…分かったよ…で、場所は？」
『あんたの部屋がある階の下よ。』
「ＯＫ。」
アリアから呼び出しを喰らった俺は外に出ると、一つ下の階に降りる。するとそこに

は右手にトランクを持ったアリアがいた。
「何の用だ?」
「用件はまずキンジの自室に入ってからよ。」
ああ、ここキンジの自室だったのか……ってアリア、キンジの部屋に押し掛けていいのか?トランク持ってるのはそのためか…。

ピンポーン

アリアは早速チャイムを押す。だが、一切反応がない。留守なのかな?

ピンポンピンポーン

アリアはもう二回程チャイムを押したが、さっきと同じく一切反応がない。
「なぁアリア、三回押しても反応ないんだったら、キンジは留守じゃ…。」

ピポピポピポピポピピピピピピピンポーン!　ピポピポピンポーン!

アリアは執拗にチャイムを連打した。おいおい、それは近所迷惑になるだろ…ってか、正直言って指痛いだろ…？

「うるさいな…誰だよ？」

すると、扉の向こうからキンジが近づいてくる音が聞こえ、そして扉が開いた。

「遅い！あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること！」

「か、神崎!?…ってか、白銀まで…!?」

「アリアでいいわよ。」

「キンジ、俺もアリアに呼ばれたんだ。あと、俺の方も光で構わないぜ。」

俺がキンジにそう言うと、アリアがキンジの制止を無視して中へ侵入していった。

「お邪魔しま～す…。」

とりあえず俺も中に入ることにした。中を見る限り、どうやらキンジも4人部屋に一人で住んでいるらしい。

「それより、何の用だよ？」

「俺も気になるな。どうして俺を呼んだのかを…。」

「そうね…言うべきね。」

俺とキンジはアリアの用件が何なのか分からなかった。アリアは俺達の方へ振り替えると、次の瞬間、とんでもないことを言った。

「キンジ、光。あんた達、あたしの〝ドレイ〟になりなさい！」

「「……はっ？」」

パーティー勧誘（強制）

俺とキンジはアリアのトンデモ発言が理解できなかった。キンジと違い、俺はアリアとの面識はあるのだが、アリアってこんな奴だったっけ？

「ほら、飲み物くらい出しなさいよ！全く無礼な奴ね！」

アリアはソファに座りながらキンジに飲み物を要求した。ソファに座る際、アリアが放課後もガバメント二丁を帯銃しているのが把握できた。

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分以内！」

コーヒーの専門用語多いな。アリアはイギリスの貴族だから紅茶を要求するのかと思ったら、まさかのコーヒー……ってか、エスプレッソ作るには確かエスプレッソマシンかモカエキスプレスがいるよな？それに今から一分以内に作れとか強引だな…。

キンジは額に汗を浮かべながらインスタントコーヒーを作る。まぁそうなるよな…一分以内でコーヒー作れと言われたらそれしかないよな…。そして見るからにコーヒーカップが3個あるな。せっかくだから頂いていくか…。

キンジは出来上がったインスタントコーヒーを持ってくると、俺とアリアに渡した。

「どうも。」

俺はキンジに軽く礼を言うと、インスタントコーヒーを飲む。アリアは差し出されたコーヒーを口にするや否や、カップに鼻を近づけて匂いを嗅ぐ。
「これ本当にコーヒー？」
「それしかなかったんだ。有り難く飲めよ。」
「…なんか変な味。ギリシャコーヒーにちょっと似てるけど……んーでも違う。」

アリアはコーヒーの味に疑問を抱きながらもコーヒーをすすっていた。もしかしてアリア、インスタントを知らないのか…？
「味なんかどうでもいいだろ。それよりもだ…。」
キンジはコーヒーをするのを止めると、カップをテーブルに置く。
「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその…お前の怒りを買うような発言をしてしまったことは謝る。でも、だからって何でここに押し掛けてくるんだ？」
「分からないの？」
「分かるかよ。白銀はどうなんだ？」
「うーん、俺もさっぱり…。」
「あんた達ならすぐ分かってると思ったのに…んー…でもその内思い当たるでしょ。まぁいいわ。」

それでいいんかい。
「お腹空いたわ。なんか食べ物ないの？」
アリアは唐突に話題を変えた。
「ねぇよ。」
「ない訳ないでしょ。あんた普段何食べてるのよ？」
「食い物はいつも下のコンビニで買ってる。」
キンジはそう答えた。あ、そういえばコンビニ行く予定だったのに、すっかり忘れてた…。
「こんびに？ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、行きましょ。」
「じゃあって…何でじゃあなんだよ？」
「馬鹿ね。食べ物を買いに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」
「俺も行くぜ。コンビニ行く予定だったからな。」
アリアに続けて俺もそう言った。確かにまだ夕食を食べてないからな…。それに俺の部屋の冷蔵庫がまだ空っぽだし、せめてジュース数本とお茶を買っておきたい。キンジは溜め息をついた。
「ねぇ、そこって松本屋のももまん売ってる？あたし、食べたいな。」
どうやらアリアの好物はももまんのようだ。ももまんとは、桃の形をしたあんまん

だ。一昔前に流行ってたけどな…。
とりあえず俺達は夕食を買いにコンビニへ行くことにした。

――――――――――――――――――――――

コンビニで買い物を終えた俺達はキンジの部屋へ戻ると、それぞれ買った夕食を食べ始める。キンジはハンバーグ弁当、俺はカツカレー、そしてアリアはももまん7個だ。既にアリアは5つ目を平らげている。おかしいな…桃の形をしただけのあんまんなのに、買い占めたい程うまいのか…?ちなみに先程のコンビニに売っていたももまんの数はちょうど7個。完成に買い占めである。

キンジはハンバーグ弁当を食べながらアリアに向けて「はよ帰れ。」と目で伝えていたが、今のアリアにそんなことが伝わるはずもなく、アリアは6つ目のももまんを味わっていた。

「…ってか、ドレイってなんなんだよ…?」

「確かに…いきなり〝ドレイになれ〟って言われても…どうすりゃいいのか…?」

「強襲科【アサルト】であたしのパーティーに入りなさい。そして一緒に武偵活動をするのよ。」

どうやらアリアの目的は、俺とキンジをパーティーに勧誘することらしい。勧誘なら勧誘ってはっきり言えばいいのに何故〝ドレイ〟なんだ……。

「何言ってんだよ。俺は強襲科【アサルト】が嫌で、一番まともな探偵科【インケスタ】に転科したんだぞ。それにこの学校からも、一般高校に転校しようと思ってる。武偵自体、やめるつもりなんだよ。それを、よりによってあんなトチ狂った強襲科【アサルト】に戻るなんて……無理だ。」

キンジは強襲科【アサルト】に戻ることに強く反対していた。言い方からして、相当大変なことがだったのだろう。

「あたしにはキライな言葉が三つあるわ。」

「いや、人の話聞けよ。」

「〝無理〟、〝疲れた〟、〝面倒くさい〟。この三つは人間の持つ無限の可能性を自ら押し留めている良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。これは光も同じよ。いいわね？」

アリアはそう言うと、最後のももまんを食べる。これは流石に「アッハイ」は言わないぞ。

「キンジと光は……そうね、あたしと同じ前衛（フロント）がいいわね。」

アリアはこうしている間に俺とキンジのポジションを設定し始めた。しかも三人

揃って前衛ってどういうことだよ…。
「よくねぇよ。そもそも何故俺と光なんだ？光だけで十分だろ？」
おいキンジ、初対面とはいえ人を売るなよ。
「太陽は何故昇る？月は何故輝く？」
アリアは謎の台詞を言った。アリア…人の話は聞いてやれよ…。
「キンジは質問ばっかりの子供みたい。仮にも武偵なら自分で情報を収集して推理してみなさいよね。」
アリアはそう言った。なんか、俺が空気になってる気けど…まぁいいか。
「そういえば光、あんた自己紹介の時かなり噂されてたわね。」
「まぁ、Ｓランク武偵って大体そうじゃない？」
「いや、あんたの方は特に噂されていたわ。何でも、〝特殊な組織に所属している〟って。」
「……。」
俺は沈黙した。そういえばアリアには説明していなかったし、蒸着した姿も見せてないからな…けど、まだ教える訳にはいかないな。
「自分で情報収集してみｒ「教えないと風穴。」…Ｏｈ，ｎｏ…。」
俺がそう言おうとしたらアリアに脅された……泣けるぜ。

「はぁ、仕方ないか…。」

いつかはアリアに言おうと思ってたけど、こんなに早い時期に言う羽目になるなんてな…。俺は一旦立ち上がると、制服のポケットから手帳を取り出す。だが、それは武偵のものとは別のものだ。

「ああ、その通りだ。俺は〝C．S．A．A．〟に所属しているんだ。」

「〝C．S．A．A．〟って確か…。」

「戦闘用強化鎧【コンバットスーツ】によるテロの情報収集・予防・制圧を行う国際組織のことよ。」

戦闘用強化鎧【コンバットスーツ】…宇宙にある小惑星から採取したレアメタルによって作られた特殊なメカスーツのことだ。身体能力の大幅な向上に加え、各種機能、人口衛星による電送が可能だ。軍隊および警察の次世代装備として注目されているが、スーツを作るためには宇宙へ行ってレアメタルを採取しなければならないことから生産性が低く、未だ個数は３００着も満たない。そのため、現在でも軍隊や警察の特殊部隊や〝C．S．A．A．〟にのみ配備されているのが現状だ。また、スーツがハッキングを受けると人口衛星からによる遠隔解除が出来なくなるなど、まだまだ問題は多い。ハッキングを受けて奪われたスーツによるテロも多発している。そのテロ行為を抑止するために結成されたのが、〝C．S．A．A．〟だ。

俺は〝C．S．A．A．〟のSOD（刑事課）に所属している。他の課と違い、SODには特定の条件を満たしていれば武偵でも所属出来るようになっている。その所属している武偵の殆どがSランクだがな。

「やっぱりただの武偵じゃなかったのね…あんたと一度組んだ時はSランクの武偵としか説明されなかったわよ？」

「色々と事情があるんだよ。それと、パーティー組むのは別にいいけど、２つ条件がある。」

「条件？」

「一つ目は〝ドレイ〟としてではなく、〝協力者〟として見ること。二つ目はスーツ強奪者との戦闘では必ずバックアップとして立ち回ること。この際は俺がフロントだ……まぁ、ざっとこの二つだ。」

「…分かったわ。」

俺が二つ程条件を提示すると、アリアは少し考えたが、了解してくれた。アリアに「こっちの仕事に関わるな。」と言っても無駄だからな…。

「…ということはつまり、光も持ってるのね…戦闘用強化鎧【コンバットスーツ】を。」

「どうして言い切れるんだ？」

「勘よ。」

アリアは勘でそう言ってきた。確かに俺はコンバットスーツ・ギャバンｔｙｐｅ・Ｇを授かっている。だけど今言うのはやめておこう…。基本的にあれは切り札だからな。
「とにかく、もう帰れよ。」
「そのうちね。」
「何時だよ!?」
「キンジが強襲科【アサルト】であたしのパーティーに入るって言うまでよ。言わないのなら泊まっていくから。」
「ファッ!?」
アリアの二回目のカミングアウトでキンジは思わず声を漏らした。
「ちょっと待て!だめだ!絶対だめだ!帰ｒ…うぇっ!」
キンジはてんぱったまま喋ったためか、食べたハンバーグをリバースしそうになった。おいおい、リバースはやめろよ…?
「うるさい!泊まってくったら泊まってくから!長期戦になる事態も想定済みよ!」
やっぱり、アリアが指差すからして、あのトランクは宿泊セットだったか…。アリアの強引なやり方にキンジのイライラが溜まっていく。そして…

「出てけっ!!」

部屋中に怒号が響きわたった。だが、その怒号を言い放ったのはキンジではなく、なんとアリアだった。

「何で俺が出て行かなきゃいけないんだよ!?ここはお前の部屋か！」

「分からず屋はお仕置きよ！外で頭を冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

完全に逆ギレのアリアの怒号に、結局キンジは追い出されてしまった。これはいくらなんでもやり過ぎだ…。キンジ、かわいそうに…。

「あんたもよ！光！」

「なんで!?」

「うるさい！風穴空けるわよ！」

理不尽だなオイ!?凶暴を通り越して狂暴だな…。俺はアリアに怒鳴られると、椅子の横に置いた買い物袋を持って部屋を出る。冷蔵庫入れなくて正解だったわ。もし入れてたら回収できなかったしな…。

――――――――――――――――

「ふぅ…。」

アリアに追い出された俺は、自室に戻ってきた。俺は冷蔵庫にコンビニで買ってきた

ものを入れる。あ、そういえばこの東京武偵高って〝あいつ〟がいたよな…？

ピピピピピッ！

すると、俺のスマホから着信音が鳴った。俺はスマホを取り出して通話相手を見る…どうやら〝あいつ〟からだ。

「もしもし。」

『よう、光！久しぶりだな！』

「猛か。」

電話相手は俺の親友・濱野猛だ。装備科【アムド】のSランク武偵で、俺と同じく〝C．S．A．A．〟に所属している。猛とは俺が武偵として活動を始めた頃からの長い付き合いだ。1年前に日本に帰国し、東京武偵高校に入学したらしい。

『昨日長官からお前が転校してくるって連絡があってさ、それで気になって電話を掛けてみたんだ。』

「ああ、別にそれは構わないぜ…それと猛、実は転校してきたばかりで自室に予備の弾がないんだ。だから弾の購入がしたいんだ。」

『弾？分かった。えーと、弾薬は？』

「９ｍｍパラベラム弾を１０箱。それとＵＳＰ用のマガジンを１０個、グロック２６用のマガジンを６つだ。」
『ＯＫ。じゃあ明日昼休み後に装備科【アムド】の棟に来てくれ。』
「ありがとな。また明日会おう。じゃあ、お休み。」
『ああ。』
俺は猛に弾薬とマガジンの注文を依頼すると、電話を切る。さてと…風呂入って寝るかな？
「本当に死ね!!このド変態!!!」
「アイエエエエエエ!?」
下の部屋でアリアの怒号とキンジの断末魔が聞こえた。あっちはあっちで大変だな……ナムアミダブツ。
俺は風呂に入ると、就寝用のジャージに着替え、寝室へ移動して寝る。